



A Series of Gemstone Notes

Emerald



Note
SHIGLASS

第一幕

君はいつもこういう『私のこと嫌いななの?』

——そんなわけないのに。

バイト先の更衣室は、閉店後でも油と洗剤の匂いが残っていた。限られた社員だけが残っている店内は、先ほどまでの喧騒けんそうが嘘のように静まり返っている。黒いエプロンを畳んでロッカーに押し込み、ネームプレートを外して、スマホを取り出しながらボタンとロッカーを閉めた。

(今日は連絡きてるかな……)

スマホを見ると、永井美流ながいみるく紅からのメッセージが七件並んでいた。

《まだ?》

《今日バイト何時まで?》

《さっき女の子と話してたの?》

《クラスの子が言ってたよ》

《なんで既読つかない……》

《私、なんかした?》

《私のこと嫌いななの?》

最後の一文を見て、僕は思わず小さく笑った。

もちろん疲れていないわけじゃない。むしろ今日は最悪だった。

夕方のピークでホールは詰まり、厨房は苛立っていて。客には『高校生だからって甘えてるんじゃない』と訳のわからないことを言われた。学校では月末に迫った修学旅行の準備調整をして、昼休みには先生から資料作成を頼まれて、放課後は友達に勉強を教えて、それからすぐバイト先のファミレスに入った。

一日中、誰かしらの人に笑いかけていた気がする。

——山下正人は感じがいい。

——山下正人は頼みやすい。

——山下正人は断らない。

おそらく、クラスの大半は僕をそういう人間だと思っている。

実際、それは大きく間違っではない。

僕はだいたいの人に優しくできるし、だいたいの頼みごとは引き受けるし、だいたいの空気は読める。

——でも、そんなものは全部、表面の話だ。

僕は扉を閉めたロッカーにもたれかかり、微かにひんやりとした金属の冷たさを感じながら美流紅に返信した。

《嫌いなわけではないでしょ》

《今終わったよ》

《女の子とは話してたけど、修学旅行のことだよ》

《今から電話するね》

立て続けに四通のメッセージを送った瞬間に既読がつく。

(ずっと待っていたんだろ……)

ずっとスマホを片手に待っていたら美流紅の姿を考えながら通話ボタンを押すと、二回目のコールで繋がった。

「……もしもし」

電話口から聞こえる声が微かに湿っている。泣いてはいない。だが、泣く直前で止まったような声だった。僕は安心させるように殊更こゝろ優しい声を意識しながら声をかけた。

「お疲れ、美流紅」

「何が。別にお疲れじゃない」

「どうしたの?」

「どうしたのじゃないし」

「うん……」

「正人くん、今日、三組の佐伯^{さえき}さんと話してた」

「ああ、それは修学旅行の班編成の件だよ」

「知ってる。知ってるけど、佐伯さん可愛いじゃん」

「そう?」

「そう? とか言うの、逆に腹立つ」

僕は笑って、もたれかかっていたロッカーから身を離して、お店を出る準備を始めた。

こういうとき、別に美流紅は本気で怒っているわけじゃない。正確には、怒りを借りないと不安を口にできないだけだ。

「僕は美流紅が好きだよ」

電話の向こうが一瞬静かになる。

「……そういうのいらないから」

返ってきた声は、甘えるというより少し苛立っていた。

「いらない?」

「そういう、好きって言えば落ち着くでしょ、みたいなもの。いらない」

「そんなつもりじゃないよ」

「あるでしょ。正人くん、そういうの上手いもん。私がどう言えば黙るか、わかってるでしょ」
美流紅らしい言い分に僕は心の中で少しだけ笑った。

「黙らせたいんじゃないよ」

「じゃあ何？」

「安心してほしい」

「それが嫌なの」

感情的な美流紅の声が震える。声の調子は怒っているのに、どこか泣きそうな声だった。

「安心したいのに、正人くんが上手すぎるから、逆に怖い」

(なるほど……どうしようかな……)

この子は本当に面白い。

欲しい言葉を欲しがるくせに、欲しい形で渡されると疑う。

甘やかされたいくせに、甘やかされている自分に気づくとこうして反発する。

「じゃあ、今のは撤回しようか……？」

「しないで」

——即答だった。

僕はまた笑いそうになる。

「撤回しない」

「……最初からそう言えばいいのに」

「美流紅がいららないうって言ったんだろ」

「そういう正論もいららない」

「……難しいな」

「私が簡単だったら、正人くん飽きるでしょ」

「飽きないよ」

「そういうのもいららない」

「でも本当だよ？」

電話の向こうで、美流紅は小さく息を吐いた。

それは、美流紅が心を落ち着けて、苛立ちが少しだけ解けた音だった。

美流紅はとても可愛い恋人だ。

——連絡が遅いと不安になり、僕が女子と話せば病み。理由をつけては『嫌いなのか?』と訊いてくる。気分の波が激しくて、たまに自分の痛みでしか心を落ち着かせられなくなることもある。

そんなところがたまらなく愛おしかった。

それに彼女の魅力はそれだけではない。

確かに、どこか少し抜けているところもあると思う。

授業中にノートの端へ変な猫を落書きしていることはあるし、数学のグラフを見て『山じゃん』とか言うし。英単語を語感だけで覚えようとする。放っておくと話が三段階くらい飛ぶことも常だ。

——それなのに、たまに妙に鋭いことを言うのだ。

「好きってさ、安心の反対側にある気がする」

前に彼女がそう言ったことがあった。

昼休みの階段で、紙パックのいちごミルクを両手で持ちながら。

「『好き』なのには？」

「好きだからだよ。どうでもいい人には、不安にならないじゃん」

その言葉は、僕の中にひどく印象的に残っている。

美流紅は自分のことを器用ではないと思っている。けれど僕は、彼女の言葉の中に、ときどき刃物みたいな知性が混ざるのを知っていた。扱い方を知らないだけで、決して馬鹿ではないし、彼女は人の痛みに関して——妙に正確で敏感だ。

「今から帰るよ」

お店の外に出ながら僕が言うと、美流紅はまた小さく息を吐いた。

「——帰ったらメッセージして」

「わかった。する」

『わかった』じゃない」

「——もちろんするよ」

「……寝落ちもしないで」

「努力する」

『努力』じゃなくて約束」

「約束」

「……じゃあ、許す」

「ありがとう」

通話を切る直前、美流紅がぼつりと言った。

「——ほんとは……正人くんが嫌いじゃないってわかってるんだけどね」

「うん」

「わかってるのに、怖くなる」

それだけ言って、通話は切れた。

僕は暗くなつたスマホ画面に映る自分の顔を見た。

人に好かれやすそうな顔。怒らなさそうな顔。誰にでも優しそうな顔。

——ずいぶん、便利な顔だと思う。

だけど、美流紅は全然わかっていないなと思うこともある。
美流紅は、僕がどれだけ彼女のことを思っているのか、わかっていないのだから。

翌日の教室で、僕はいつも通り笑っていた。

「正人、修学旅行のルート案見てくれた？」

「おう、見た見た。山田やまだが行きたがってたエリアを回れるように、電車の時間確認して調整した」といた

「マジか助かる。マジでお前いないと回らないわ！」

「ははっ、大げさな」

そんな会話をしながら、女子に頼まれたプリントを先生のところへ持っていき、戻りがけに男子の冗談へ適当に笑い、席へ戻る途中で美流紅に視線を向けた。

美流紅は窓際の席で頬杖をついていた。

髪はゆるく巻いていて、目元は少し濃い。リップは薄い赤。制服は校則ぎりぎり、長袖のカーディガンを指先まで伸ばしている。

（——今日も可愛い。けど……）

彼女の周りには、二人だけ友達がいた。派手すぎないけれど、美流紅の感情の波をわりと受け止められる子たちだ。

美流紅は僕と一瞬目が合うと、ぷいっとわざとそっぽを向いた。

(機嫌が悪いな……)

——けれど最悪というほどではない。

美流紅は機嫌が悪くなると、右耳のピアスを触りだす癖があった。今はただただ視線を合わせずにいるだけだ。

昼休み、僕は購買で買った小さな袋を持って、屋上へ続く階段の踊り場へ向かった。屋上は立ち入り禁止だが、その手前の踊り場は人が来ない。僕たちはよくそこで会っていた。

美流紅は先に来ていた。膝を抱えて隅っこで座っている。

僕を見上げる目は、少し不機嫌で——少し嬉しそうだった。

「——遅い」

「三分前だよ」

「私の中では遅い」

「美流紅時間？」

「そう。世界は私中心に動くべきだと思ってる」

「いいね、王様みたいで」

「そこは女王様って言って」

隣に座ると、美流紅は僕の手元を覗き込んだ。

「それ、私の？」

「うん」

「餌付け？」

「はは、近いね」

「私、甘いもので機嫌直る女だと思われてる？」

「違う？」

美流紅は袋を受け取ると、少し悔しそうに中を覗いた。

中に入っているのは、小さな粒が連なったみたいなの、もちもちした輪っかのドーナツだった。

「……これ好き」

「知ってる」

「知ってるの、むかつく」

「嫌い？」

「好き」

「僕のこと？」

「ドーナツの話」

美流紅はそう言って、いそいそと袋から取り出したドーナツを一口かじった。

柔らかい生地を噛んだ瞬間、頬が少しだけ緩む。

「機嫌直った？」

「直ってない」

「口元、直ってる」

「うるさい」

単純で、危うくて、可愛い。

「正人くん、今日もバイト？」

「ある」

「ええ……またあ？」

「また」

「人気者で、勉強もして、バイトもして、私の相手もして、いつ寝てるの」

「うーん、授業中」

「嘘つけ。正人くん、先生に当てられてもだいたい答えるじゃん」

「じゃあ寝てないかも」

のらりくらりとした調子で雑談を楽しんでいると、美流紅はドーナツの袋を握りしめたまま、少し黙った。袋を握りしめる手に少し力が入っている。

「——ねえ」

「うん？」

「私、正人くんの時間を食べてる？」

「食べてる」

そう言つて、でも彼女の顔が強張る前に、すぐさま僕は続ける。

「でも、僕があげたくてあげてる」

美流紅は固まったまま、数秒後に小さく眉を寄せた。

「そういう言い方、よくない。結局私が奪つてるんじゃない」

「奪つてるわけじゃないよ。僕があげてるんだもん」

「でも、負担になつてゐるわけじゃん」

「負担になつてゐないよ？」

「嫌にならないの？」

「ならない」

「なんで？」

「美流紅だから」

彼女はまた黙る。そんな彼女に手を伸ばすと、美流紅は少し迷つてから指を絡めてきた。力が強い。「逃がさない」とでも言いたげな握り方だ。

けれど僕からすれば、その必死さがたまらなく愛おしい。

「正人くんと手繋ぐと、ちょっと戻る」

「何が」

「目の中の電気」

「なにそれ」

「切れてるときあるじゃん。私の中の電気。手繋ぐと戻るんだ」

彼女はこんな風に時々不思議な言い回しをするが、いつもその例えは、妙によくわかるのだ。彼女の瞳は、不安なとき本当に光が薄くなる。逆に、僕が手を繋ぐと光が少し戻るのだ。

「じゃあ、僕は美流紅の充電器だ」

「正人くん……充電器にしては顔がいいね」

「褒めてる?」

「褒めてる」

そう言っ、ようやく美流紅は馬鹿みたいに笑った。釣られて僕も思わず笑う。

その瞬間の、世界はとてとても単純で、僕と彼女だけのものだった。

以前、美流紅が僕と付き合ってから、少し頭が良くなった、と言ったことがある。

もちろん成績の話ではない。彼女の数学は今でも怪しいし、古文単語はたぶん半分くらい霧
囲気で読んでいる。

その日、僕たちはバイト前に駅前の本屋へ寄った。たった二十分だけの逢瀬おうせだった。僕は参
考書を見たかったし、美流紅は「本屋の匂いって頭よさそうで好き」と言っつけてきた。

鉱物と宝石の小さな図鑑が平積みされていて、美流紅はそれをやけに真剣に眺めていた。

「宝石って、石なのに人間の願望背負わされすぎじゃない？」

「急にどうしたの」

「だって、恋愛運とか魔除けとか永遠の愛とか、石からしたら知らんがなって感じじゃん」

「まあ、確かに……」

「——でもさ」

彼女はページをめくる。色とりどりの石の写真が、蛍光灯の下で光っていた。

「人間って、言葉だけじゃ足りないとき、物に意味を込めるんだね」

その言い方に、僕は少し驚いた。

「美流紅、そういうところあるよね」

「そういうところって？」

「たまに、急に核心みたいなこと言うところ」

美流紅は目を丸くしたあと、少しだけ疑うように目を細めながら僕を見た。

「それ、褒めてる？」

「褒めてる」

「——ほんとに？」

「ほんと。今の、すごく美流紅らしくて好きだった」

美流紅は凶鑑の端を指でなぞりながら、そっと視線をそらした。

「……そういう言い方も、なんかずるい」

「ずるい？」

「怒れないじゃん」

「今の、怒るところあった？」

「ないけど。ないから困る」

美流紅はそっと凶鑑を閉じる。一瞬何事かを考えるように目を瞑ると、僕の方をじっと見つめてきた。

「——正人くんのせいだよ？」

「何が？」

「知らないこと増えた。余計なことまで考えるようになった。前は、明日学校行きたくないとか、あの子に嫌われたかとか、そういうことばっかだったのに」

彼女は図鑑の表紙を指先で撫でながら、考えを整理するようにぼつりぼつりと言葉を続ける。

「世界つてもっと狭いと思ってた。学校と家とスマホの中くらいで終わると思ってた。でも正人くん、いろんなところ連れてくじゃん。本屋とか、夜の駅前とか、知らない道とか、コンビニの新商品売り場とか」

「最後のは広い世界に入る？」

「入るよ。私にとつては」

美流紅は笑った。

その笑顔があまりに素直で、僕は一瞬、胸の奥を掴まれたような気がした。

「広い世界に溺れてる」

「大げさな」

「……ほんとだよ。私、泳ぎ方知らないもん」

——じゃあ僕が手を引けばいい。

そのとき自然にそう思った。

たぶん、その頃からもう決まっていたのだと思う。美流紅がどれだけ僕を疑っても、僕が離れるという選択肢は最初からなかった。

むしろ、彼女が沈みそうになるたび、僕の手を必要とすることが嬉しかった。

第二幕

美流紅の服装が気になったのは、五月も中旬を過ぎた頃だった。

彼女は最近いつも薄手のカーディガンを脱がなかった。最初は冷房がかかっている場所も増えてきて肌寒いからだと思った。でも、手首まで隠す仕草が増えた。僕が近づくと、袖口を指で引くのだ。

(これは……)

その様子にチリチリとした、奇妙な感覚が後頭部のあたりに触れるのを感じていた。調べてみると——原因は、クラスではなかった。

美流紅の中学時代を知る誰かが、SNSで彼女のことを匂わせていた。名前は出していない。

けれど、わかる人にはわかる書き方だった。

——昔から重かった。

——すぐ病む。

——男ができたら依存する。

——今の彼女かわいそう。

そんな言葉が、匿名の画面の中で薄く笑っていた。

どうやらそのことに最初に気づいたのは美流紅の友達だったらしい。それを美流紅に見せまいとしていたようだ。

けれど、人は隠そうとすると、逆にわかりやすくなるものだ。

ある日の昼休み、美流紅が近づいた瞬間に、友達の一人がスマホを伏せた。もう一人が、不自然に話題を変えた。『なんでもないよ』と笑った顔が、少し固かった。

そんな、わずかな違和感。美流紅は、そういう空気に妙に鋭いところがある。

その日の夜、彼女は自分で探してしまった。

探さなければよかったものを、探して、見つけて、最後まで読んでしまったようだ。

放課後、僕はバイトまでの三十分を使って美流紅を校舎裏に連れ出した。彼女はいつものように軽口を叩かなかった。風で髪が揺れて、伏せた目元のメイクが少し滲んでいる。

「――見せて」

僕がそれだけ言うと、美流紅は固く笑った。

「なにを？」

「手」

「やだ」

「美流紅」

名前を呼ぶと、彼女はびっくりと少しだけ肩を震わせた。

数秒後、諦めたように袖をまくる。

白い肌に、細い傷がいくつかあった。深くはない。けれど、そこに至るまでの気持ちを想像すると、胸の奥が冷たくなる。

僕は怒らなかつた。

……怒るべき相手は、美流紅じゃない。

「痛かつたね」

そう言つて、彼女の手首をそつと包んだ。美流紅は泣きそうな顔で笑う。

「怒らないの？」

「怒らないよ」

「気持ち悪いって思わない？」

「思わない」

「面倒でしょ」

「面倒なんかじゃない」

「嘘」

「嘘じゃない」

言いながら、我慢の限界を迎えたのか彼女の目に涙が溜まる。僕は彼女を抱き寄せた。

「大変だったね」

「……うん」

「隠さなくていいんだよ」

「うん」

「僕はいから」

そう言うと、美流紅は僕の制服を握りしめた。細い指が、制服の布地に必死に布へ食い込む。耐えかねて決壊した感情が嗚咽おえつとなって彼女の喉を震わせていた。

——僕は彼女の背中を撫でながら、静かに別のことを考える。

（誰が書いた）

（誰が笑った）

（誰が美流紅をここまで追い詰めた）

彼女を抱きしめる腕の力は優しく。頭の中だけは、ひどく冷静だった。

*
*
*

こういう時、正面から責めるのは簡単だ。でも簡単な方法は、足がつくおそれがあるし、大したダメージを相手に与えられないかもしれない。僕はそれが嫌だった。

相手を黙らせたいなら、怒鳴る必要はない。その人間が一番守りたい場所に、静かに傷を入

ればいい。

投稿の主の輪郭が見えるまで、時間はかからなかった。美流紅と同じ中学だった、別の高校に進学した女子。

どうやら普段はなかなかそれなりにうまくやっているらしい。

友達も多く、部活でも中心。委員会活動も率先して行っている。先生からの印象も悪くない。推薦の話も出ている。

(なるほど……)

そういう場所にいる人間は、表の顔を大事にするものだ。

——僕は一切嘘をついていない。

ただ、あるアカウントが美流紅だけでなく、他の子の恋愛や家庭の事情まで匂わせていたこと。

投稿の時間帯や言い回しが、ある人物の生活圏と妙に重なること。

過去に同じような話を、本人が軽い冗談として口にしていたこと。

そういう事実を、必要な人に、必要な部分を、必要な順番で渡した。

——最初に気づいたのは、昔その子に秘密を話したことがある誰かだった。

次に、その友達だった。

それから、部活の同級生。委員会のグループ。最後に、先生。

——噂というのは怖い。

誰かを傷つけるときより、自分に向かってくるときの方がずっと速いのだ。

数日後、その匿名アカウントは消えた。

——でも、消えたことが逆に答え合わせになった。

彼女は部活のグループから距離を置かれた。委員会の仕事からも外された。

推薦の面談は、いったん保留になったらしい。

噂話をすることは、大きな罪に問える内容ではない。だから、誰かがはっきり罰したわけではない。

——ただ、みんなが少しずつ彼女を信用しなくなった。

それだけで、人の居場所は簡単に崩れていく。

でも、そのことを美流紅は何も知らない。

「最近、あの変な投稿……消えたんだ」

ある日の昼休みの踊り場で、美流紅が不思議そうに言った。

「そうなんだ？」

「うん。なんだったんだろ……？」

「飽きたんじゃない」

「ふうん」

美流紅は隣に座る僕の肩に頭を預けた。

「正人くんがいると、嫌なこと減るんだ」

「そうなの？ それなら……よかった」

僕は彼女の髪を撫でた。

——美流紅は気づかない。

——周りも気づかない。

その子が失ったものの大きさも、たぶん知らない。

それでいい。

美流紅を泣かせたものが、美流紅の世界から消えた。

ただ、それだけのことだ。

第三幕

修学旅行前日の夜、僕はまたバイトで遅くなった。

学校では準備の最終確認、放課後は足りないものの買い出し、夕方からファミレス。客入りも多く、休憩はほとんど取れなかった。スマホを見る暇がなかったせいで、美流紅みるくからの通知はまた溜まっている。

《今日、全然話せなかった》

《忙しいのわかってる》

《でも正人まさひとくん、みんなに優しい》

《私じゃなくてもよくない?》

《ねえ》

《私のこと嫌いななの?》

いつもの美流紅の言葉に、僕は薄く微笑みながら、駅まで歩く道すがら電話をした。

「ねえ、美流紅」

「……なに」

「今、声聞きたかったんだ」

これだけで、向こうの呼吸が少し変わる。

『扱いやすい』と思う。

でも、その扱いやすさごと僕は美流紅を愛している。

「嘘」

「嘘じゃない」

「私、面倒なこと言った」

「言ったね」

「嫌だった？」

「可愛かった」

「頭おかしいの？」

「かも」

美流紅は少しだけ笑った。電話口から美流紅の笑いを含んだ呼吸が聞こえてくる。

だが、またすぐにその声が沈んだ。

「だって、正人くんは何でも持つてるじゃん？」

「何でもは持つてないよ」

「持つてるよ。友達もいるし、先生にも好かれてるし。女子にも優しいし、バイトもしてるし、ちゃんとしてるし」

「それで？」

「私は、重いし、すぐ病むし、全然ちゃんとしてないし、腕もこうだし」

——言葉が切れた。

腕というのには、自分の傷を指しているのだろう。

何かを言い淀むように、微かな沈黙が流れた。やがて、心を振り絞るように、息を吸い上げる音がすると、言葉が続いた。

「——いつでも捨てられるじゃん。私なんか」

僕は思わず立ち止まった。駅前の光が、濡れたアスファルトに伸びて線を描いている。

通行人の足音と車の音が、薄い膜の向こうから聞こえてきた。

【捨てられる】

その言葉が、ひどく遠いものを感じた。

(僕が?)

(美流紅を?)

そんな未来は、最初から想定していない。

むしろ、僕のほうがずっと先に決めている。美流紅がどれだけ不安になっても、逃げようとしても、勝手に壊れようとしても、僕はそのたびに拾い上げる。彼女を傷つけるものは遠ざける。彼女が安心できる言葉を選ぶ。彼女が僕から離れないように、ちゃんと世界を整える。

けれど、それをそのまま言うのと、たぶん美流紅は怖がる。

——だから僕は、いつもの声で言った。

「ねえ、美流紅？」

「なに」

「明日、修学旅行一日目の夜だけどき、会おう？」

「……そっち忙しいでしょ」

「いや、会う」

「クラスの仕事は？」

「夜の仕事はもう他の人に任せてある」

「なんで」

「記念日だから」

電話の向こうで、美流紅が息を止める。

——実は、僕たちの記念日は、付き合い始めた日だけではない。

去年、高校に入学して少しした頃、美流紅が初めて僕の前で泣いた日だ。

放課後の空き教室で、彼女は誰にも聞こえないように泣いていた。僕は偶然そこにいて、彼女は『見ないで』と言いながら、結局僕の袖を掴んだのだ。

その日から、彼女は僕の前で少しだけ壊れるようになった。

僕はそれを、少しだけ嬉しいと思った。

「覚えてたの？」

美流紅の声が震えている。

「もちろん、覚えてるよ」

「私、忘れられてると思ってた」

「僕と美流紅の思い出だよ。忘れない」

「……正人くん、ほんとにずるい」

「明日の夜、ホテルのロビーで」

「うん」

「待ってて」

「うん。わかった」

少し間があつて、美流紅が小さく言った。

「待ってるね」

その言葉が、妙に耳に残った。

翌日、修学旅行一日目は朝から随分と慌ただしかった。駅に集合して、点呼を取って、バス

に乗って、新幹線に乗って、またバスに乗って。先生から配られた予定表は細かい文字で埋まっています、クラスメイトたちはその一つひとつに大げさに騒いでいた。

僕はその中で、いつも通り笑っていた。

「おーい！ 正人、こっち写真撮って！」

「はいはい」

「山下、班長会議の集合時間って何時だっけ？」

「二十時半。ロビー横の小会議室」

「正人くん、これ先生に渡しといてもらっていい？」

「いいよ」

誰かに呼ばれて、誰かに頼られて、誰かに笑いかける。

修学旅行という非日常の中でも、僕の役回りはあまり変わらなかった。

ただ、時折視界の端に映る美流紅だけが、いつもより少し違っていた。

彼女はいつも通り友達二人と一緒に行動していた。

派手すぎないけれど、少しだけ気合の入った梳かしこまれた髪。いつもより丁寧に整えられた目元。長袖のカーディガンは、やっぱり指先まで伸びている。

観光地の人混みの中で、僕と目が合うたび、美流紅は一瞬だけ嬉しそうな顔をする。けれど次の瞬間には、僕の隣で笑う別の女子を見て、すぐに目を逸らした。

——わかりやすい。

とてもとても可愛い。愛らしい。

でも、だからと言って、放っておくときつとまた悲しい想いをして、どんどん沈んでいってしまうだろう。それはきつとこの修学旅行という大切な想い出の中ではふさわしくない。

僕は班行動の途中、人目を盗んでこっそりとスマホを開いた。

《夜、ちゃんと行くからね》

それだけ送ると、少しして既読がついた。

《ほんとに？ 大丈夫？》

《ほんと》

《忙しそう》

《忙しくても行く》

《そういうの信じたいけど信じたら負けな気がする》

《じゃあ負けて》

テンポよく進んでいたメッセージが止まり、しばらく返事が来なかった。

「おーい、正人ー？」

少し離れたところを歩いていた班員がこちらに向かって手を降っている。

「どうしたー？」

呼び返したところで、スマホが軽く震えた。視線を向けると、短く一言だけメッセージが表示されていた。

《むかつく》

僕は画面を見て、少し笑うと呼んでいる班員の方に向かって歩いて行った。

本当に美流紅は面白い。

救われたいくせに、救われると怒る。

信じたいくせに、信じる前に疑う。

手を伸ばしてほしいくせに、伸ばされた手を見て『罨かも』と考える。

それでも、最終的には僕の手を取る。

そういうところまで全部、僕はちゃんと知っている。

夜のホテルは、昼間の観光地とは別種の騒がしさがあった。

部屋割りに浮かれる声。部屋の設備を嬉々として弄り回す歓声。売店へ向かう足音。廊下で先生に注意される男子。友達同士で写真を撮る女子。普段より少しだけ自由で、でも完全には

自由な訳じゃない、修学旅行特有の浮ついた空気。

それら全てをどこか遠くから楽しみながら、僕は班長会議を終えたあと、配布物を先生に返し、明日の集合時間をクラススのグループに送った。

「おい、マサ坊ー！ そろそろ時間じゃねえの？ 後はこつちに任せて行ってこい！」

夜の仕事を任せていたクラスメイトの道明寺（しみよ）が、大柄な体をさらに広げて声をかけてきた。時計をみると、二十一時二十分を指している。

「ああ……助かる」

「彼女としっぽりしけ込んでこい！」

礼を言うと、笑いながら背中をバシバシと力強く叩かれた。思わず軽く苦笑を浮かべながら振り返ると、満面の笑顔でぐっと親指を立てる姿が見える。

思わず苦笑を深め、軽く手をふりこちらにも親指を立てて返した。

「ありがとう。行ってくるよ」

ロビーの照明は暖色で、昼間よりもずっと静かだった。観光パンフレットの棚、使われてい

ないソファ、フロントの奥で低く響く事務的な声。大きなガラス窓の向こうには、知らない街の夜がぼんやり滲んでいる。

美流紅は、窓際のソファに座っていた。

黒いカーディガンの袖を指先まで伸ばし、膝の上に小さな紙袋を置いている。隣には誰もいない。友達と一緒にではない美流紅は、いつもより少し小さく見えた。

僕が近づくと、彼女は顔を上げた。

「遅い」

「ごめん。先生に捕まった」

「人気者は大変ですね」

そういつて、唇を横一文字に引き結んで、ため息をついた。

「拗ねてる?」

「拗ねてない」

「じゃあ怒ってる?」

「怒ってもない」

「じゃあ何?」

美流紅はもう一度ため息を着くと、少しでも唇を失らせた。

「待ってた」

その一言には、色々な感情が込められていた。

僕は隣に座る。ソファがわずかに沈んで、美流紅の肩がほんの少し近づいた。

お風呂に入った後なのだろう。いつもとは違う甘い香りが美流紅から漂ってくる。

「来たよ」

「……うん」

「待っててくれてありがとう」

「そういう丁寧なの、たまにむかつく」

「どう言えば正解？」

「知らない。自分で考えて」

「難しいな」

「簡単じゃ意味ないじゃん。難しくしてるの」

美流紅はそう言って、そつと膝の上の紙袋を両手で持った。

その仕草が、いつもの彼女にしては妙に慎重で、どこか恐る恐るしているように見えた。

「正人くん」

「うん」

「これ、あげる」

紙袋をそのままそつと差し出される。

「僕に？」

「うん」

受け取っていいものか、少し考えながら聞き返すと、彼女は静かに頷いた。

「記念日だから？」

そう訊くと、美流紅は視線を逸らした。

「……そういうの、先に言わないで」

「ごめん」

「当てられると、渡しにくいから」

「じゃあ初めて気づいた顔するね」

「もう遅い」

文句を言いながら、それでも美流紅は袋を僕の手には押しつけた。

中には、小さな白い箱が入っていた。深い緑色のリボンがかかっている。

それを見た瞬間、なんとなく予感がした。

丁寧に結ばれたリボンを解き上蓋を持ち上げる。

——銀色の細いチェーン。

その先に、小さな緑の石がついていた。

ホテルの温かみのある照明を受けて、その石は洞窟の奥にある水底みなぞこのような深い光を静かに放っていた。

「……エメラルド？」

「うん」

美流紅は、紙袋を押し付けた後、窓の方に視線を向けて、僕のほうを全く見なかった。

「本物かどうかは知らないよ。そんな高いやつじゃないし。お小遣いで買えるやつだし」

「十分だよ」

早口で捲まくし立てる美流紅の言葉に、こちらを見ていないことはわかりながら優しい笑みを口元に浮かべながら、答えた。

「——お守り、みたいな」

「お守り？」

「うん。綺麗だったから。あと、正人くんに似合うかなって。持つててくれたら、ちょっと嬉しい」
それ以上、美流紅は言わなかった。

——けれど、僕にはわかっていた。

あの日、本屋で見た宝石図鑑。

石に意味を込める人間の話。

エメラルド。

『愛の成就』『誠実』『変わらない愛』

そして——浮気を防ぐお守り。

美流紅はたぶん、調べたのだ。

自分で『意味』を選んだのだ。

言えば重すぎるから、言わないまま、石に託した。

誰にでも優しい僕が怖いから。

修学旅行先でも、クラスを中心にいて、女子にも男子にも笑いかける僕が怖いから。

それでも『怖い』と全部言えば、また自分が重くなると思ったから。

だから彼女は、この小さな縁を渡してきた。

「ねえ、美流紅？」

「なに」

「これ、意味調べた？」

聞いた瞬間、緊張したように彼女の指が、カーデイガンの袖をぎゅつと握る。

「……ちよつとだけ」

「そっか」

「変？」

「ううん。全然変じゃない」

「ほんとに？」

「ほんと」

美流紅はカーデイガンの袖を握った手を置いた膝の上を見つめたまま、小さく息を吐いた。

「正人くんって、誰にでも優しいじゃん？」

「うん」

「今日も、みんなに呼ばれてた」

「うん」

「女子にも普通に笑うし」

「うん」

「私、たまにわかんなくなる」

少しだけつつかえるように吐き出す声が、いつもより少し低くなる。

「ちゃんと私の彼氏なのか、みんなの正人くんなのか」

「美流紅のだよ」

「そういうこと、簡単に言う」

「簡単じゃないよ」

「簡単に聞こえる」

「じゃあ、何回でも言う」

「そういうのもずるい」

「うん」

「認めるな」

そう言って、美流紅は少し笑った。

でも、すぐにその笑みが頼りなく溶けてほどけていく。

「お守りってさ」

「うん」

「信じてる証拠じゃなくて、信じきれない気持ちの置き場所なのかも」

（まただ……）

彼女はいつも、少し抜けたことを言ったと思ったら、急にこんなふう为核心に触れる言い方

をする。

「安心したいとき、人って形が欲しくなるでしょ」

「うん」

「だからね、これ」

彼女は僕の手元で箱の中に収められているエメラルドを見た。

「これが、私の、形」

その掠かすれる声が、胸の底に落ちて、小さな波を広げていく。

美流紅は、自分の不安を僕に押しつける代わりに。ただ、小さな石に閉じ込めて渡してきた。

——浮気を防ぐため。

——誠実でいてほしいから。

——変わらないでいてほしいから。

——ああ、そんなもの。なくてもいいのに。

僕は最初から、美流紅以外を見ていない。

佐伯さんと話していても。クラスメイトに囲まれていても。先生に頼られていても。修学旅

行先で誰に笑いかけていても。僕の内側に入れる場所はひとつしかない。

美流紅は知らない。

僕がどれだけ彼女を見ているか。

彼女の機嫌をどう整えているか。

彼女を傷つけるものをどう遠ざけているか。

彼女が僕から離れる未来を、どれだけ丁寧に潰しているか。

知らなくていい。

知ったら、きつと怖がる。

僕は箱の中から、エメラルドのチェーンを取り出した。

「大丈夫。なくても一緒にいるよ」

美流紅は目を伏せる。

「……うん」

「でも、くれるなら持つよ」

「私が安心するから？」

僕は少し考えて、目を瞑りながら大きく首を左右に振った。

「ううん。違うよ。美流紅がくれたものだから」

美流紅の目に涙が浮かぶ。それでも彼女は笑った。

「ほんと、正人くんってずるい」

「そう？」

「そう。私ばかり重いみたいになる」

「重くていいよ」

「よくないでしょ」

「僕は好きだけど？」

美流紅は呆れたように、でもどこか嬉しそうに笑った。

「正人くん、たまにやばいよね」

「たまに？」

「うん。たまに」

……惜しい。

『たまに』じゃない。

僕はずつと、たぶん最初からやばい。

けれど表に出さないから、誰も気づかない。美流紅も気づかない。

僕が彼女の不安定さを愛していることも。その不安を利用してうまく抱きとめていることも。彼女を傷つけた相手を裏で処理していることも。

気づかないまま、彼女は今日も僕を見上げる。

「ねえ、つけて」

「いいよ」

急かすように僕の胸元に視線を向ける美流紅に笑いかけながら即答した。

「失くさないようにしてね」

「もちろんだよ」

僕は手で揺れる緑色の石を両手で持ち直し、繊細なフックを慎重に指先で外し広げた。そのままチェーンを広げて自分の首に回して、首の後ろで指先の感覚を頼りにフックをひっかける。

「……あ」

僕の首の上で揺れる小さな緑をじっと見つめた美流紅が、微かに声を出した。

「どうしたの？——ひよっとして、美流紅がつけたかった？」

美流紅からの貰い物に少し浮かれていたのかもしれない。思わず自分でさっと着けてしまつたが、ひよっとして美流紅がつけたかったのかなと不安になった。

「うん。着けてくれたのが嬉しかっただけ」

「そっか……よかった」

嬉しそうに。だけどどこか少し照れたように微笑む美流紅を見て、ほっと息を吐きながら僕も笑い返した。

「どう？ 似合う？」

「うん」

「よかった」

揺れる小さな石をもう一度見て、彼女は満足そうに頷いた。

それから、隣に座る僕の手に自分の小さな冷たい手を重ねて、指を絡めると握りしめた。

とても強い力でぎゅっと。

いつもの、逃げ道を塞ぐような握り方で。

だから僕も握り返す。

——彼女が思うより、ずっと強く。

「——もう戻らなきゃだね」

お互いの手を握りしめあつてしばらく窓の外を眺めていると、美流紅がポツリと言った。

「そうだね。先生に見つかると面倒だし」

「面倒なの嫌？」

「美流紅からならどんなことでも大歓迎だけど、先生の面倒は嫌かな」

「何それ」

彼女はおかしそうに小さく笑った。

ロビーの時計は、二十二時を少し回っている。

確かにそろそろ部屋に戻らなければならぬ。

彼女の手をとってソファから立ち上がる。

エレベーターの前で、美流紅はふと立ち止まった。

「正人くん」

「うん？」

「またここで待ってるね」

その言葉は、約束みたいで。祈りみたいで。少し呪いみたいでもあった。

「——うん」

だから僕は力強く頷いた。

「待ってて」

美流紅は安心したように力が抜けた様子で笑った。

そして女子部屋のある階へ向かうエレベーターに乗り込んでいく。

扉が閉まる直前、彼女はもう一度だけ僕を見た。

長い袖。細い手首。少し危うい笑い方。

友達は少ないけれど、ちゃんという。世界を全部諦めたわけじゃない。でも、世界の中心に僕を置いてしまっている。

——すごく、可愛いと思う。

エレベーターの扉が閉まった。

僕はしばらくその場に立っていた。

胸元のエメラルドに触れる。

小さな石は冷たい。

けれど、その冷たさの奥に、美流紅の熱が閉じ込められている気がした。

明日になれば、彼女はまた不安になるかもしれない。

僕が誰かに笑いかけただけで、また『私のこと嫌いな？』と訊くかもしれない。

そのたびに僕は否定する。慰める。手を繋ぐ。必要なら甘いものを買う。抱きしめる。

そして、彼女を傷つけるものがあれば、見えないところで消していく。

それでいい。

僕がそうしたいのだから。

エメラルドがなくても、僕は離れない。

お守りがなくても、誠実でいる。

浮気を防ぐ意味なんてなくても、僕の目は最初から美流紅にしか向いていない。

それなのに彼女は、こんな小さな石に願いを込めた。

こんなものなくても僕たちは永遠に一緒なのに。

——本当に、面白い子だ。